

# *DSSR*

Discussion Paper No. 16

比較史の復活へ：西洋中心主義的一国史学とグローバル史学の双方を超えて

小田中 直樹

Naoki Odanaka

Nov 25, 2013

Data Science and Service Research  
Discussion Paper

---

Center for Data Science and Service Research  
Graduate School of Economic and Management  
Tohoku University  
27-1 Kawauchi, Aobaku  
Sendai 980-8576, JAPAN

## 比較史の復活へ

西洋中心主義的一国史学とグローバル史学の双方を超えて

小田中直樹 ([odanaka@econ.tohoku.ac.jp](mailto:odanaka@econ.tohoku.ac.jp))

本稿は、

(1)2013 年度日本西洋史学会大会（2013 年 5 月 11 日、京都大学）全体シンポジウム「東アジアの西洋史学」においてなされたコメント

「What is History in the Age of Globalization ?」

(<http://www.econ.tohoku.ac.jp/~odanaka/cv/2013kyoto.pdf>) を和訳し、さらに大幅な加筆修正を加えたものである。

(2)東京都歴史教育研究会・秋季講演会（2013 年 12 月 14 日、東京都立石神井高等学校）および北海道高等学校世界史研究会・冬季研究会（2014 年 1 月 10 日、北海道札幌平岡高等学校）におけるトークにおいて用いられる予定である。

(3)日本学術振興会科学研究費・基盤研究(b)（研究代表者・小山哲、課題番号 24320147）にもとづく研究成果の一部である。

## [1]はじめに

21世紀初頭の歴史学界を垣間見ると、いくつかのトレンドが力を得つつあることに気づきます。そのなかで、なによりもまず留意すべきは「グローバル史学 (global history)」と「文化史学 (cultural history)」の2者でしょう。<sup>1</sup> それは、両者が1970年代以降の歴史学、のみならずひろく人文社会科学の全体を席卷したとあってよい2つのトレンド、すなわちポスト・コロニアリズムとポスト・モダニズムを、おのおの批判的に継承する存在とみなしうるからです。

このうちグローバル史学は、19世紀に制度化された歴史学がコロニアリズムを孕んできたことを批判する点をポスト・コロニアリズムから継承するとともに、単なる「北（旧宗主国）中心主義批判＝南（旧植民地）中心主義」に陥りやすいという後者の欠点を回避しようとして試みています。文化史学は、広義にはルネサンスに始まるモダニズムの諸思想に通底する人間万能主義を批判する点をポスト・モダニズムから継承しつつ、後者が言語や「構造」といった何物かが歴史を規定すると考える別種の基底還元主義的な思考に陥りがちであることを批判し、あたらしい歴史の見方を提示しようとしています。<sup>2</sup> グローバル史学はポスト・ポスト・コロニアリズムとして、文化史学はポスト・ポスト・モダニズムとして、各々、いわば先行者（ポスト・コロニアリズム、ポスト・モダニズム）と先先行者（コロニアリズム、モダニズム）を止揚しようとしているといってもよいかもしれません。

今回のトークでは、このうち前者すなわちグローバル史学を取上げ、それが21世紀初頭という今日の（歴史研究と歴史教育を含む広義の）歴史学に持つ意義について考え、歴史学のトレンドとしてのグローバル史学を評価します。<sup>3</sup> そのうえで、グローバル史学の先

---

1 「global history」は、通常日本では「グローバル・ヒストリー」と訳されています。ただし「グローバル・ヒストリー」だと「グローバルな歴史そのもの」か「グローバルな歴史を研究する営為」なのか不明になるため、ここでは「グローバル史学」という耳慣れない訳語を充てることにします。

2 文化史学の紹介としては、長谷川貴彦「物語の復権／主体の復権」(『思想』1036、2010)がよくまとまっています。また『思想』1074号(2013)が、このトレンドの牽引者であるピーター・バークの業績に即した特集「ピーター・バークの仕事：文化史研究の現在」を組んでいます。バーク自身のアーギュメントとしては、たとえば『文化史とは何か』(長谷川貴彦訳、法政大学出版局、2010、原著2004)があります。

3 グローバル史学の紹介としては、なによりもまず水島司『グローバル史学入門』(山川出版社・山川リブレット、2010)が簡明にして適切です。グローバル史学の牽引者であるケネス・ポメラントの業績は、邦訳では『グローバル経済の誕生』(共著、吉田敦他訳、筑摩書房、2013、原著1999)が読めるようになりました。ただし、彼の主著であり、今日におけるグローバル史学の正典『大分岐』(Pomeranz, K., *The Great Divergence*, Princeton : Princeton UP, 2000)は、現時点では未訳です……が、そのうち訳されるに違いない(希望的観測)。

グローバル史学がいかなるポテンシャルを孕んでいるかについては、興味深い試論である羽田正『新しい世界史へ』(岩波書店・岩波新書、2011)が(個人的にはいろいろと不満と批判がありますが、とりあえず)必読。またグローバル史学にもとづく通史の試みとしては、桃木至朗他『市民のための世界史』(大阪大学出版会)が近刊予定です。

なお、日本におけるグローバル史学は大阪大学が拠点となっていますが、これは、グローバル史学の思想

にある歴史学の可能性について、探求を試みます。

まずグローバル史学の評価という課題については、グローバル史学の主要な批判対象である西洋中心主義的一国史学 (euro-centric national history)、グローバル史学の直接的な先行者であるポスト・コロニアル歴史学、この二者と比較しつつ、次の3つのステップを踏んで取組みます。第1に、グローバル史学の特徴を史学史的な観点から概観します。第2に、そのメリットを確定します。第3に、グローバル史学がはらむ問題点を明らかにします。次にグローバル史学の先に存在しうる歴史学の探求という課題については、グローバル史学のメリットを生かしつつ、その問題点を回避しうるトレンドのありかたについて、「比較」をキーワードにしながら考えます。

## [2]グローバル史学の史学史

グローバル史学を正確に定義することはなかなか困難ですが、とりあえず「国家という単位をこえ、可能であれば世界全体という空間を分析対象とする、という研究アプローチを採用する歴史学のトレンド」と定義しておきましょう。このように定義すると、このトレンドが意識的にか無意識にか孕んでいる特徴が顕在化してきます。それは「分類しないこと」への欲望です。「対象をまるごと捉える歴史学(全体史)」(リュシアン・フェーヴル)たることを究極の目標としている、といってもよいかもしれません。

この特徴は、一国史学とりわけ近年まで歴史学の主流をなしてきた西洋中心主義的一国史学、およびそれを批判して誕生したポスト・コロニアル歴史学と比較し、史学史的な時空のなかで考えるとき、その意義が理解しやすくなります。<sup>4</sup>

### ①まずは西洋中心主義的一国史学

一国史学は、19世紀のドイツ諸邦において、「実証主義的歴史学」という名のもとに明確なかたちをとりました。その創始者としてしばしば引かれるのはレオポルド・ランケですが、彼は科学としての歴史学の作法(方法論)を確立するとともに、歴史学者おのおのが帰属する国家に貢献することを(少なくとも暗黙の)目的とし、その論理的帰結たる国家や国民を分析単位・アクターとするような学問領域として歴史学を再構築しました。そ

---

的源流の一つをなす世界システム論を日本に紹介した川北稔さんが同大で長年教鞭をとり、秋田茂、桃木至朗といったグローバル史学の論客を招いたことが大きいと思います。

4 「ナショナル・ヒストリー (national history)」を「一国史学」と訳すのは、正確に言えば、「ナショナル・ヒストリー」の含意を十分に伝えきれていないという点で、不適切です。学としてのナショナル・ヒストリーは、空間領域 (territory) としての国家 (state) あるいは共通の属性をもった (想像の) 共同体としての国民 (nation) を歴史のアクターとして設定する点では、一国史学と称するにふさわしいものです。ただし、ナショナル・ヒストリーは、それにとどまらず、とりわけ近現代においては、当該国家・国民の一体性や凝集性を強化するためのイデオロギー装置として、すなわち「あるべき=国民であれば知っておくべき=国家が提供するべき」歴史たる正史 (official history) を生産し、提供する学と位置付けられました。ここでは(字数の関係で) 正史の生産装置という意味も含めて「一国史学」という語を用います。

れまでヨーロッパで支配的だった歴史思想たる「普遍史」と比較すると、その斬新さは明らかです。<sup>5</sup> そして、少なくとも 20 世紀後半まで、ランケ的な一国史学は、歴史学において従うべきモデルとして機能してきました。

一国史学においては、しばしば、研究対象たる空間を、今日存在する国家から逆算して分類して設定します。もっとも、今日存在する「境界」を直接そのまま過去に適用するのは、どう考えても無謀です。それゆえ、境界（ボーダー）を、いかなる根拠にもとづいてどこに引き、いかにして空間を空間の「内部」と「外部」に分類するか、という問題が重要になります。ここに典型的に現出するとおり、一国史学は「分類すること」への欲望に憑かれています。

そして、一国史学における「分類すること」への欲望の先には「序列化すること」への欲望があります。それは、ランケ以来の一国史学が西洋中心主義という特徴を共有してきたからです。この時代の歴史学は、世界は、民主化や工業化など近代化において世界の最先端を行っていた西洋、とりわけイギリスが頂点をなし、フランス、USA・ドイツ・ベネルクス、イタリアや日本、そして大幅に遅れているその他諸国が底辺をなすヒエラルヒーをなし、このヒエラルヒーが「横倒しの世界史」（大塚久雄）を構成しているという時空間認識を共有していました。西洋とりわけイギリスが普遍的存在すなわち基準として機能し、他の諸国はイギリスとの「相違」すなわち「距離」すなわち「遅れ」にもとづいてこの時空間のなかに序列化され、位置づけられることとなります。開国後の日本における歴史学、ひろく人文社会科学、さらには言論界の歩みを顧みれば、そこに「序列化すること」への欲望を見て取ることは容易でしょう。<sup>6</sup> 20 世紀後半に至るまでの主流的な歴史学は、日本のみならず世界各地において、「分類すること」への欲望を孕み、「分類すること」と「序列化すること」によって国家に奉仕するべく機能する西洋中心主義的一国史学というスタンスを共有していました。

## ②次にポスト・コロニアル歴史学

第二次世界大戦後、世界はアジア・アフリカ・ラテンアメリカ各地の独立・脱植民地化という事態を経験しますが、脱植民地化の経験が思想的な次元で咀嚼されるには 1970 年代を待たなければなりません。こうして登場したのが、世界システム論、新従属論、あるいはオリエンタリズムといった思想・理論です。<sup>7</sup> そして、これら思想・理論は歴史

---

5 普遍史については、岡崎勝世『聖書 vs. 世界史』（講談社・講談社現代新書、1996）および同『世界史とヨーロッパ』（講談社・講談社現代新書、2003）がわかりやすい見取り図を示しています。

6 富国強兵、文明開化、脱亜入欧、東洋の英国、西洋中心主義（コンプレックス）の裏返しとしての「近代の超克」、ローマ字論など、枚挙にいとまありません。

7 世界システム論については、その唱道者イマニュエル・ウォラーステインの諸著作が、ほとんどすべて日本語で読めます。代表作である『近代世界システム』は、最近、第 4 巻が邦訳され、ついでに第 1 巻から第 3 巻までが新装版として再登場しました（川北稔訳、名古屋大学出版会、2013、原著 1974/80/89/2011）。新従属論については、たとえばアンドレ・グンダー・フランク『従属的蓄積と低開発』（吾郷健二訳、岩波書店、1980、原著 1978）が古典的な存在です。オリエンタリズムについては、エドワード・サイード『オリ

学にも影響を与え、いわばポスト・コロニアル歴史学とでも呼ぶべきトレンドを生み出すこととなります。ポスト・コロニアル歴史学は、西洋中心主義的一国史学に対して、西洋を基準とする「序列化すること」という根拠なき欲望を内包し、元宗主国にして先進国たる「北」が元植民地にして発展途上国たる「南」を（脱植民地化後も）経済的に、あるいは事実上政治的に支配していることを正当化する知を供給しているとして批判します。そして「南」の側から歴史を読みなおすべきことを主張します。

ただしポスト・コロニアル歴史学は、西洋中心主義における「序列化すること」への欲望を批判することに急なあまり、じつは「南」のほうが上であり、上だったという逆の「序列化すること」への欲望を内包する傾向があります。その典型が、かつて新従属理論の旗手だったアンドレ・グンダー・フランクがしばしの沈黙ののちに発表し、賛否両論を惹起した書『リオリエント』です。<sup>8</sup> 同書においては、北（旧宗主国）中心主義に対するフランクの批判は、結局のところ南（旧植民地）中心主義という序列化に行きついてしまいます。気持ちはわかりますが、ある「序列化すること」への欲望を批判しているうちに、別の「序列化すること」への欲望が裏口から入りこむというのは、これはまずい。

### ③そしてグローバル史学

これら先行する二つのトレンドに対して、グローバル史学は、空間的な境界を重視することを拒みます。グローバル史学が各種のネットワークを重視していることから、そのことがよくわかります。商人のネットワーク、宗教組織のネットワーク、商品のネットワーク、貨幣のネットワーク、思想のネットワークなどなど、グローバル史学におけるネットワークの研究は、挙げればきりがありません。<sup>9</sup> そして、これらネットワークが国家や国民をこえて（時代や対象にもよりますが、場合によっては）グローバルな規模で展開していたことを明らかにすることが、グローバル史学の主要な目的をなしています。

このようなグローバル史学のスタンスには、分析対象空間を境界で区切り、「内」と「外」に分類しようとする意志はみられません。というよりも、そのような分類を意図的に拒もうとする傾向が感じとれます。それは、「分類すること」への欲望が「序列化すること」への欲望をオートマティックに喚起することに対する恐れがなせる業ではないでしょうか。かつてポスト・コロニアル歴史学は、「分類すること」それ自体は放棄せず、「南」と「北」を分類するという営為は西洋中心主義的一国史学と共有したうえで、前者に対する低い評価を批判したわけです。しかし、これでは、序列化への欲望を抱えている点で、西洋中心主義的一国史学とかわるところがありません。結局のところ分類しつつ序列化しないことは難しいのであり、「序列化すること」というア priori な営為を避けたいのであれば、そ

---

エンタリズム』(上下、今沢紀子訳、平凡社・平凡社ライブラリー、1993、原著1978)で決まりでしょう…  
…が、読むのがしんどい(というよりも、序章だけ読めば十分という気もする)本です。

8 フランク『リオリエント』(山下範久訳、藤原書店、2000、原著1998)。

9 とりあえず Fukasawa, Katsumi, *Toilerie et commerce du Levant au XVIIIe Siècle* (Paris : CNRS Editions, 1987) / 深沢克己他『信仰と他者』(東京大学出版会、2006) / 黒田明伸『貨幣システムの世界史』(岩波書店、2003) / Robert Palmer, *The Age of Democratic Revolution* (Princeton : Princeton UP, 1959/1964) などがあります。

の前にある「分類すること」という営為を拒む必要があります。空間的な境界の設定を忌避するグローバル史学のスタンスには、ポスト・コロニアル歴史学の「失敗」から学ぼうとする意思が見てとれます。

「分類すること」と「序列化すること」の欲望に憑かれた西洋中心主義的一国史学。「序列化すること」への欲望を批判したが、結局は別の「序列化すること」への欲望を内包してしまったポスト・コロニアル歴史学。そして「分類すること」への欲望を放棄することによって「序列化すること」への欲望も否定しようと試みるグローバル史学……史学史からみたグローバル史学の特徴は、ここに求められます。

### [3]グローバル史学のポテンシャル

このような特徴をもつグローバル史学は、それではいかなる意義あるいは長所を有しているのでしょうか。ぼくは、まずは次の2点を挙げるべきだと思っています。なお、両者は、グローバル史学の先行者のひとつであり、グローバル史学が直接的な批判対象とした西洋中心主義的一国史学がはらんでいる2つの特徴——そのうち1つは、ポスト・コロニアル歴史学が倒錯したかたちで共有しています——に対するアンチテーゼをなしています。

#### ①一国史観・国家アクター史観からの脱却の試み

一国史観とは、研究対象たる空間を、しばしば今日存在する国家から逆算して分類し、設定するスタンスのことです。そもそも、学界のありかたからして、対象国名が付いた歴史学会が活動していたり、自己紹介するときに「某々（対象国名）史です」と言ったり、大学によっては対象国名が付いた教員ポストがあったりするなど、日本のみならず世界各地において、いまでも一国史観がひろく存続しています。<sup>10</sup>

この一国史観は、一国史学において、意識的にか無意識にかしばしば採用されています。一国史観というスタンスは、場合によっては適切なものとなりうるし、必ずしも「間違い」というわけではありませんが、不適切だったり間違いになったりすることがある（というか、おそらくはそのほうが多い）ので、その存否や介在の程度については十分な注意を払うことが必要です。もちろん、ご存じのとおり、とりわけ1970年代から日本にも積極的に導入されるようになった社会史学（social history）は、国家とりわけ「国民国家」を単位とする「ものの考え方・見方の枠組」を相対化するべく、とりわけ「地域」を単位とする歴史の重要性を説き、世界システム論と相まって相当程度事態を変化させてきたように思いますが、それでも、とりわけ実践（praxis）の次元において、一国史観の呪縛には根強いものがあります。<sup>11</sup>

---

10 対象国名が付いた歴史学会の例としては、フランス史を研究しているぼくに近いところでは、USAにはフランス史学会（French Historical Society）があり、イギリスにはフランス史研究学会（Society for the Study of French History）があり、日本には日仏歴史学会があります。

11 国民国家に批判的な方法論としての社会史学については、なによりもまず『全体を見る眼と歴史家たち』や『歴史学再考』をはじめとする二宮宏之の一連のしごと（二宮宏之著作集、全5巻、岩波書店、2011）と、

次に国家アクター史観とは、非人格的な存在である国家を行為主体とみなし、主語の位置に置いて歴史を語るスタンスのことです。たとえば、最近ぼくは高校世界史教科書の近代ヨーロッパの部分執筆する機会を得ましたが、1848年の三月革命について記述するに際して、ついつい「ドイツは」と書きそうになってはっとしました。ご存じのとおり当時「ドイツ」という国家は存在しなかったし、そもそも「ドイツ」がなんらかの行動にできることはありえないわけですから、これは誤った表現であり、修正が必要です。そして、これがぼくの単なる個人的なミスあるいは資質のなせる業であれば事態はシンプルですが、実際にはそうではないはずです。ちゃんとリサーチしてみたわけではありませんが、国名を主語とする文が頻出する書籍や論文は、歴史学の領域においては決して少なくないし、むしろ結構な割合で存在しているといつてよいのではないのでしょうか。そして、その背景には、これまでひろく受容されてきた一国史学が、一国を分析や叙述の単位とし、歴史学の任務は国家に貢献することにあると考える点で、国家アクター史観と相性が良いという特徴を持っていることがあります。

国家アクター史観が相当ムチャな営みだということは、非人格的な存在は行為主体にはなりえないことを考えれば、すぐに理解できるでしょう。ところが、歴史学におけるもろもろの記述においてはこのムチャが結構な大手を振ってまかり通っているのですから、世界は驚きにみちあふれているわけです。

グローバル史学は、分析単位として国家を特権化せず、また、歴史におけるさまざまなネットワークの存在や活動を重視することにより、一国史観や国家アクター史観を相対化し、そこから脱却することを試みます。これは、後二者がさまざまな問題を孕み、にもかかわらずとりわけ実践の次元で強い影響力を維持しているだけに、歴史学に対してきわめて重要な問題提起をしていると評価できます。

## ②西洋中心主義・非西洋中心主義からの脱却の試み

歴史学が西洋中心主義的であることに、論理的な必然性はありません。しかしながら、前述したとおり、少なくとも学術的とみなしうる歴史学が19世紀のドイツ諸邦という、いわば欧州の辺境あるいは相対的後進国（遅塚忠躬）で成立したことを背景として、そこには「西洋が歴史の中心である」という根拠なき自負と「歴史の中心たる西洋に参加したい」という強い願望が、奇妙にねじれたかたちで混在するという現象が生じました。

西洋中心主義が単に一部のドイツ人の願望にとどまったということであれば、別に大した問題ではなかったでしょう。しかし19世紀は西洋の世紀であり、西洋諸国がその他の地域を植民地化してゆく時代でした。西洋中心主義は現実すなわち眼前に展開される歴史によって裏付けられ、願望から真理に格上げされてゆきます。そして、今度は、この真理が歴史学に導入され、歴史学は西洋中心主義的でなければならないということになります。さらに、このような西洋中心主義的歴史学が、国家に貢献し奉仕する一国史学と結びつくとき、そこには「文明開化（洋務運動、和魂洋才、その他）による富国強兵」という国家

---

そして、社会史学と世界システム論を独自なかたちで接合しようとした柴田三千雄『近代世界と民衆運動』（岩波書店、1983）が参照されるべきでしょう。



的スローガンに奉仕する歴史学が出現することになります。

問題はここにとどまりません。歴史学の歴史にとって、19世紀は実証主義にもとづいて学術的な歴史学が成立し、歴史学が一つの学問領域（ディシプリン）として認められ、制度化される出発点をなしていました。実証主義とは、史実（データ、事実）に即してアーギュメントを組み立てるということを意味します。したがって、そこには、歴史学は価値中立的であり、それゆえに学術的な学問領域たりうるという判断が伏在しています。歴史学は真実のみ奉仕する、というわけです。これは、学術的な学問領域にとっては当然の態度であり、前提です。

それでは、西洋中心主義は、かくのごとき実証主義といかに併存しうるのでしょうか…というよりも、そもそも併存しうるのでしょうか。後者の問いに対する答えは「ノー」でなければなりません。これからは（日本を除く）アジアの時代だという言説が幅を利かせる現実をみるだけでも、西洋中心主義は単なる根拠なきイデオロギーであり、実証主義と両立しえないものであることは明らかだからです。

ところが、西洋中心主義的一国史学が優越する時代においては、両者の矛盾が問題にされることはありませんでした。それは、1970年代までは西洋の政治経済的な優位がまだ残存していたという時代的背景や、西洋の利点を探しつつ「西洋とは未完のプロジェクトであり、あるいは理念型である」（ユルゲン・ハーバーマス、大塚久雄）といった言説をもちいたりして西洋中心主義の延命を図る知的営為の産物だったといえます。西洋中心主義的一国史学は、依然として実証主義的な存在であると自称できたわけです。

ところが1970年代に入ると、石油危機を一つの契機として日本を含む西洋の高度経済成長が終焉を迎え、西洋中心主義を支えてきた現実的な文脈がおおきな変動にみまわれました。こうして、知的な次元において、実証主義的な西洋中心主義がはらむ矛盾をきびしく批判するトレンドが登場します。ポスト・コロニアリズムです。このトレンドは、当然ながら、歴史学の領域にも影響を及ぼさずにはいませんでした。

ところが、かくして登場したポスト・コロニアル歴史学は、西洋と非西洋を「南北関係」として捉えたうえで、「南」たる非西洋の歴史的な優位性を語ろうとする傾向にありました。すなわち、新従属理論から借りた「国際不等価交換論」などを持ちいて、非西洋は西洋に収奪されたがために遅れたのであり、大航海時代に始まるこの事態がなければ、非西洋は西洋の優位にあったはずだと主張したわけです。しかし、西洋中心主義がイデオロギーにすぎないのと同様に、非西洋中心主義もまたイデオロギーにすぎません。両者はコインの裏表をなしているといつてもよいでしょう。

このような状況のなかで、グローバル史学は、西洋中心主義に対する批判をポスト・コロニアリズム（ポスト・コロニアル歴史学）と共有し、のみならず非西洋中心主義にとどまりがちな後者をも超克しようとしています。実証主義的であることを義務付けられている学術的な歴史学にとって、みずからの前提・理論・方法論・枠組などがじつは西洋中心主義または非西洋中心主義をアプリオリにはらんでいるのではないかと問いつづける自己反省的な（リフレキシヴな）スタンス……これは、歴史学界においてグローバル史学がもつ重要な意義であるとみなせます。

## [4]グローバル史学の陥穽

だからといって、グローバル史学に欠点がないとか、あるいは危険をはらんでいないとかいうわけではありません。ここでは、グローバル史学が陥りやすい陥穽のうち、ぼくの目についた点を2つ挙げておきます。なおグローバル史学は現在進行形のトレンドであり、論者のあいだにはスタンスや方法論・理論・枠組をめぐってかなりの距離があるため、ぼくが指摘する陥穽が彼（女）たち全体にあてはまるわけではありません。

### ①方法論的総体主義（ホーリズム）の誘惑

ぼくには、グローバル史学は、すくなくとも理論・方法論の次元では、方法論的総体主義に陥りつつあるようにみえます。

先述したとおり、グローバル史学は「分類すること」への欲望を批判し放棄することにより、西洋中心主義的一国史学とポスト・コロニアル歴史学を超克しようと試みています。ただし「欲望」に対する批判は、別の「欲望」を生むという結果に至りがちです。この場合でいえば、それが「分類しないこと」への欲望です。

たしかに、すべて「分類すること」は主観的で恣意的な営為です。すなわち、一国史学が研究対象の単位として「国家」を選択することには、なんら客観的で科学的な裏付けはありません。それは単に、研究の主体たる歴史学者が自らのナショナルアイデンティティに、意識的にか無意識にか、ふかく囚われていることの反映にすぎない、というべきでしょう。

それでは、グローバル史学は「分類しないこと」によって客観的で科学的な対象設定を実現しているのでしょうか。

この点を考えるに際して、まず示唆的なのは、「グローバル」という形容詞ですら時代的な制約を受けているという地理学者クリスチャン・グラタルの指摘です。<sup>12</sup> 彼はフェルナン・ブローデルの影響をつよく受け、地理学的歴史学（geo-histoire）の提唱者にして旗手として知られる人物ですが、「対象をまるごと捉える」意思は肯定的に評価しつつ、対象たる「世界」を「グローバル」と定義し形容するという営為には時代的・社会的な背景があることに注意を促しています。すなわち、世界をまるごと対象とする歴史学が、大抵「ワールド・ヒストリー」でもなく「インター一国史学」でもなく「トランス一国史学」でもなく「グローバル・ヒストリー」とよばれているのは、ぼくらがグローバル化の時代に生きているからです。グローバル史学とは、ヒト・モノ・カネ・思想など、すべての「財」がスムーズに流通する時代すなわちグローバル化の時代が生んだ「ものの見方」の一環をなしているものであり、その意味で純粋に客観的・科学的なアプローチではありません。

さらにいえば、はたしてグローバル史学は本当に「分類しないこと」を志向しているのでしょうか。じつは、そうではありません。たしかに、分析対象の空間的な次元については、とりあえず世界全体を「場」として設定し、そこにおけるさまざまな財が国境をはじめとする境界をこえて移動するさまを描き出すわけですから、「分類しないこと」への欲望

---

12 Christian Grataloup, *Géohistoire de la mondialisation* (Paris : Armand Colin, 2010), chap.10.

をみてとることは可能です。ただし、今日の時点でぼくらが手にしているのは、特定の財（コーヒー、貨幣、茶、綿布、貴金属、その他）のグローバル史学であり、あるいは特定の時間・時期・時代に関するグローバル史学です。もちろんこれら営為、とりわけ後者は、きわめてチャレンジングな試みです。<sup>13</sup> それにもかかわらず、ぼくらの観点からすれば、グローバル史学は、少なくとも現時点においては、分類の次元を「空間」から「対象や時間」へと移動させたにすぎないといわなければなりません。「分類すること」への欲望は、依然として伏在しているのです。

ただし「分類すること」への欲望が伏在しているという評価は、グローバル史学は無意味な営為であるという批判を意味するものではありません。そもそも、重要なのは「分類すること」を拒むことではなく、その先にある「序列化すること」を避けることにあります。一国史学は「分類すること」ではなく、むしろ「序列化すること」によって正史となり、国家に奉仕する学問となるからです。

さらにまた、グローバル史学が欲望する「分類しないこと」には、方法論の次元において、重大な問題が孕まれているからです。もしも「分類しないこと」をつきつめるというのであれば、それは「単一の存在 (unity) としての時空間」の歴史を分析対象として選び取ることに帰着します。しかしながら「単一の存在としての時空間」を分析するとは、いかなる営為なのでしょう。そのためのアプローチ・方法論・理論を、歴史学はそなえているのでしょうか。

この点を考えるうえで示唆的なのは、エマニュエル・ウォラーステインの「世界システム論」に対して佐藤俊樹が加えた批判的な検討です。<sup>14</sup> 佐藤によれば、ある対象を分析するという営為は、その特質を明らかにすることを主な目的とします。そして、そのためには、他のなんらかの対象と比較することが不可欠になります。ところが、ウォラーステインの場合、ある時点における地上の空間すべてを「世界システム」という単一の存在とみなすわけですから、空間的な比較は不可能になります。それでは、いかにすれば世界システムの特質を明らかにできるか……それは、世界システムが出現する前の世界、彼の言葉によれば「世界帝国」と比較することです。ここでなされているのは比較の次元を「空間」から「時間」に変更することであり、比較という営為そのものは、分析の方法としては放棄されていません。むしろ、比較なき分析は不可能であるというべきでしょう。そうだとすれば「単一の存在としての時空間」を分析するという、グローバル史学を突き動かす「分類しないこと」への欲望が追求する営為は、科学としての歴史学にとっては見果てぬ夢にすぎない、といわなければなりません。グローバル史学は、「分類すること」への欲

---

13 羽田『新しい世界史へ』（前掲）や同編『海から見た歴史』（東京大学出版会、2013年）を手に取れば、その面白さと新しさと危うさがわかります。

14 佐藤俊樹『社会学の方法』（ミネルヴァ書房、2011年）、pp.168-175。ちなみに佐藤の本は、どれも一読の価値があります。たとえば、21世紀開始直後に始まった「不平等論争」の契機となった『不平等社会日本』（中央公論新社・中公新書、2000）、その続編というべき『格差ゲームの時代』（中央公論新社・中公文庫、2009、初版2002）、日本における「桜」のイメージの歴史を追う『桜がつくった「日本」』（岩波書店・岩波新書、2005）など、じつに刺激的です。

望を伏在させているがゆえに科学たりえているのです。<sup>15</sup>

## ②歴史把握における対立軸のシフト：「南北」から「東西」へ

グローバル史学の正典たるポメラント『大分岐』は、東アジア（中国沿岸部、日本）とヨーロッパは、18世紀中葉まではほぼ同水準の、見方によっては前者のほうが高水準の経済成長を遂げていたが、後者がいち早く工業化に成功したのはなぜかという問題を設定し、両地域の異同を確定するという作業に乗り出します。そして、上記設問に対する解答を、後者とりわけイギリスが鉱物資源および原料供給地兼商品市場としての新大陸に恵まれていたという偶然に求めます。こうして、ぼくらの目は、ポスト・コロニアル歴史学が重視し強調してきた「南北問題」から、いわば「東西比較」へと移動することになります。<sup>16</sup>

東西比較への視点のシフトは、それだけをとってみれば、大した問題ではないように思われるかもしれませんが、しかしこのシフトは、なぜか、西洋中心主義を拡張して「西洋&東アジア中心主義」にするという営為に帰結してしまいます。少なくとも18世紀中葉までは両地域間の経済的差異は相対的なものであり、またヨーロッパの経済成長は偶発的な要因によるものだったというわけですから、ここからは「東アジアも大したもんだ」という感想が、さらには「東アジアは『南』ではなく、むしろ『北』に属すると考えるべきだ」という立場がもたらされることになるからです。

さらに、日本という東アジアの一部に位置する土地に暮らすぼくらにとっては、この「西洋&東アジア中心主義」は一種の「癒し」として機能します。日本をはじめとする東アジアが18世紀半ばまでヨーロッパの同水準の経済成長を実現しており、その後の格差も偶然の所産だとしたら、開国後の日本、少なくとも日本歴史学界に付きまどってきた西洋に対

---

15 もっとも、歴史学の課題は「分析」することでなければならないと断言することはできないでしょう。ある時期や空間や事象を描写することもまた、それが過去に属するものであれば、歴史学の課題であり営為でありうる、と考えることも可能です。ここで、ぼくらは、そもそも歴史学のしごと・課題とはなにか、そのためにはいかなるアプローチ・方法論・理論が必要であり有効であるか、という根本的な問題に直面することになります。これまでぼくが言及してきた「分析」とは、もう少し厳密に言えば、過去におけるある事象を他の事象と比較することにより、当該事象の原因と結果を明らかにし、それによって当該事象の特質を析出する、という営為です。これを「科学」とよぶことにしましょう。これに対して過去の事象を描写するとは「それが実際にはいかなるものだったか」（ランケ）を明らかにすることです。この営為を「芸術（art）」とよぶことにしましょう。そうすると、問題は、歴史学は「なぜ」を問う科学なのか、それとも「いかに」を描く芸術なのか、ということになります。歴史学は科学か芸術か……これは、古来さまざまな歴史学者や哲学者によって論じられ、論者によって回答が異なり、また現時点では正解のない問題である、といえるでしょう。それゆえ、ここでは、ぼくの個人的な意見を申述べることで満足せざるをえません。ぼくは、歴史学は科学であり、したがって「なぜ」を問う営為であり、したがって「分類しないこと」への欲望は放棄するべきであると考えています。

16 2013年度日本西洋史学会大会のキーノートスピーカーを務めたのは韓国の歴史学者イム・ジヒョンでしたが、彼のトーク「国民史の布石としての世界史」もまた、世界の歴史における東西比較を強く意識したものでした（小山哲訳、『思想』近刊）。

する劣等感（およびその裏返しとしての西洋憎悪）はもはや無用の長物となります。「実は日本も大したものだったんだ」という感想は、長年いわくいいがたい劣等感に悩まされてきたぼくらにとって、深い癒しとなる力を秘めています。<sup>17</sup>

しかし、歴史学は、本来「癒し」などとは無縁の存在であるはずですが。また、もしも東アジアとヨーロッパが18世紀中葉まで「北」に位置する存在だったというのであれば、これら地域とそれ以外の「南」との関係が問われるべきでしょう。ポメラントウたちの所説の先に進むのであれば、そこから得られるべき前提としての知見は「日本も大したものだ」ではなく「東アジアおよびヨーロッパと、それ以外の地域は、歴史上いかなる関係を取りむすんでいたか」でなくてはなりません。「南北問題」というポスト・コロニアル歴史学が問題にした構造そのものは、ボーダーラインの引かれ方が変化しただけで、消滅してはいないからです。

そして、ぼくらにとって興味深いことに、ここにはグローバル史学が忌避したはずの「分類すること」への欲望がみてとれます。すなわち「北」の内部において「東」と「西」を分類することであり、「東」と「西」からなる「北」と、表立っては言及されることのない「南」を分類することです。やはり「分類すること」への欲望は、グローバル史学にあっても伏在しているのです。

## [5]グローバル史学から、もう一度「比較史」へ

かくして問題は、「分類すること」への欲望といかにつきあうか、そして、その先にある「序列化すること」への欲望といかにつきあうか、という2つの点に絞られてきます。

先述したとおり、歴史学は、その営為の一環として「分類すること」を含んでいるがゆえに、科学たりえています。しかし、ぼくらは、「分類すること」は客観的で科学的な営為などではなく、主観的で恣意的で、強い政治性を帯びがちで、しかも「序列化すること」につながりやすいものであることがわかってしまった時代に生きています。「分類すること」は、歴史学にとっては、功罪あわせもつ微妙な営為であるといえるでしょう。

そうであれば、科学としての歴史学は、主観的な営為であることを認識したうえで「分類すること」にもとづいて対象を設定し、その原因と結果を探求するか、あるいは、対象の「系譜を追うこと」に客観性と科学性を求める営為として自己を再定義するしかありません。<sup>18</sup> それによって「序列化なき分類／比較」を実現できれば、その延長線上に科学としての歴史学を（再）構想することが可能になります。

---

17 さらに、ポメラントウたちが日本人歴史学者の所説や業績を大幅に援用していることも、グローバル史学が日本歴史学にとって「癒し」として機能することに貢献しているように思います。ちなみに援用された所説や業績の例としては、「勤勉革命」論（速水融）やアジア間貿易論（杉原薫）があります。なお、これらはきわめて優れた、またオリジナルな業績です。

18 分類学と系譜学の関係については、三中信宏『系統樹思考の世界』（講談社・講談社現代新書、2006年）、同『分類思考の世界』（講談社・講談社現代新書、2009）、同『進化思考の世界』（日本放送出版協会・NHKブックス、2010年）を参照してください。わかったような、わからないような、不思議な気分させられる三部作です。

問題は、いかにすれば「序列化なき分類／比較」が可能になるか、すなわち「序列化すること」への欲望を制御する具体的な方策を考案できるか否かにあります。ぼくは、そのためには、アダム・スミスいうところの「共感」すなわち他者の立場に身を置いて想像する能力の育成・強化を重視することが有効だと考えています。<sup>19</sup> たとえば、さまざまな国に属するひとびとが、共感にもとづいて一国史学を比較すれば、「序列化なき分類／比較」が可能になるのではないのでしょうか。すなわち「共感を基盤とする比較史的一国史学 (sympathy-based comparative national histories)」とでもよぶべき営為です。

東アジアにおけるグローバル史学をけん引する韓国の歴史学者イム・ジヒョンは「真にグローバル化された中心なき歴史 (worlding and decentered history)」により、グローバル史学と一国史学 (彼の言葉では「国民史」) の共犯関係を解きほぐすべきことを提唱しています。<sup>20</sup> これは着目に値する提案ですが、ただし「真にグローバル化された中心なき歴史 (worlding and decentered history)」と「共感を基盤とする比較史的一国史学 (sympathy-based comparative national histories)」の目的は同じ、すなわち「序列化すること」への欲望の否定です。両者は「序列化すること」なき歴史学への二つの道とみなしうるでしょう。そして、「真にグローバル化された中心なき歴史」がいかなるものであるのか、現時点では十分に分からない以上、ぼくらは、しばらくは「共感」・「比較」・「一国史学」という手持ちの道具を組合せながら、どうにかやってゆく (ブリコラージュ) しかないのではないか……そうぼくは考えています。

---

19 スミスの意味における「共感」という営為が歴史学においていかなる機能と意味を持ちうるかについて  
のぼくの考えは、Odanaka, Naoki, “From Responsibility to Compassion” (*Zeitschrift für Japanisches Recht/Journal of Japanese Law*, 31, 2011)にまとめてあります。

20 イム・ジヒョン「国民史の布石としての世界史」(前掲)を参照。